

やまと 民俗への招待

鹿谷 紹

奈良県内でマツリとい
えば普通秋祭りのことを
指す。神社に祀(ささ)られてい
る神が、1年に1度この
マツリの際に社殿から外
へ旅にして、少し離れた
「御旅所」に入り、ここ
で人々の饗應(きょうおう)を受ける。
年末の春日若宮(わかみや)おん祭り
はその代表格だといえ
る。こうした神靈の移動
が「お渡り」とか「渡御」
と呼ばれる。御旅所を設
けずに行う祭りも多い。
渡御には神の乗り物と
しての「神輿」が用いら
れる。神輿と共に人々は
渡御行列に加わるが、そ
の先触れとして、肩に担
ぐ布団太鼓（太鼓台）や
車を付けて曳くダンシリ
などの雛子屋台が氏子の
地域を廻ることがある。
社殿の間近で神官が
厳(おぞ)かに行う神事とは対
照的に、こうした布団太
鼓やダンシリなどは、氏
子の人々が直接に参加し
て祭りの賑わいを作りだ

す神賑行事だ。多くの人がこれを見ることで、祭りの雰囲気はいやが上にも高まる。生み出された音やリズムが大きな楽しさとして強く人の記憶に残り続ける。

布団太鼓は、角材を組んだ四角の台に鉄打ち胴長太鼓を縦にはめ込み、上に四本柱を立て、その上に3～5枚の布団を積み上げる。下の四角の台には台棒（担ぎ棒）を取り付け、人々はこれを肩で担ぐ。

江戸時代、綿の栽培が三河や大阪で急速に広まり、庶民の木綿の利用も次第に進んだ。その綿を包み込んだ憧れの布団太鼓の上に載せて趣向を凝らした風流の見世物としたのが布団太鼓だつた。こうした布団太鼓は



小泉神社境内の太太鼓（太鼓台）

—2010年10月10日、筆者撮影

布団を載せた太鼓台

東大阪市、堺市、岸和田市など大阪府内に広く分布するが、瀬戸内海沿岸から九州佐賀の伊万里のトントンテンツン祭りや長崎くんちなどの出し物にもなつて伝わっている。

東北分社を本部から上総墨指団で移すことを誓う。

の龍
などして、
から柳生
北部か
布して、
はな

田神社も見ら
生や阪
ら山城
いるが
や吉野
社のよ
く入母
地域も

龍田　れ、益原などまで庄、宇陀の丹生うに、屋の屋ある。

昭形布川のく真地天
其の姿を由4下重

トの四十
人の少
女の太鼓
巾を被
んでいこ
る。催大
の生駒

山西
本柱の
少年た
うて太
る。こ
鼓打ち
鼓の願

患われ
内側で
ちが投
鼓を打
の投げ

は、
頭
る。
条村 思わ 神祭 頭巾 ち込

和郡は、北の辺に提^{ちよう}と校生^{こうせい}が担^{たん}んでいた。

山市の殿前に
町、河
中学生 灯太鼓だいこ
以上が
西側に
ぐ太鼓
た。布

小泉に西方、市原、市
までは太鼓を出
はさう

本町、神社で場と並小太鼓し、高台を担に女性台並んは今も

和35(1960)年に行われた平城遷都1250年祭では、周辺から28台の布団太鼓などが集結して祝つたこともある。布団を載せる太鼓台がいつごろ生まれたかは、まだよく分かっていないが、寛政10(1798)年刊行の『摂津名所図会』には、難波神社の夏祭りに布団太鼓台が登場している。大勢の男たちがはしまきを締め、下帯に足袋裸足で布団太鼓を担いでいるが、布団は本物を

(現東大阪市)では幕頃、朝田の清助はんや沖川の五平さんらが、太鼓台が欲しくてひそかに手に入れ、村の有力者がこれを認め、近辺で初めて太鼓台を持つことになつたという。その運用は村の統制下にあつたが、布団太鼓が江戸時代の村々に定着していく過程が分かる珍しい事例だ(『河内四条史』第4冊)。

でいた。布団太鼓は今も各地で進化を続けてい
る。

表

(奈良民俗文化研究所代)